

現在の課題

学習者用端末の利活用が進む一方、課題も見られておりますので、幸手市で実際に起きたいくつかの事例を紹介いたします。

● Teams内で、児童生徒が勝手にチームを作成してしまつた。(チームを作成する際には、目的を明確にするとともに、学校の先生の許可を得てから行うことになっていきます。)

● 児童生徒が、各家庭で、学習以外の目的のメッセージのやり取りを行っていた。使用時間も夜遅くだった。

● ミライシードのカードを使って、他者への誹謗中傷を行った児童生徒がいた。

● 端末の落下等による破損が増加している。また、タブレットの紛失も目立つ。

これらの事例が起きたときには、該当する児童生徒だけでなく、全体への適切な指導を行うとともに、保護者等へもお知らせするなどし、再発防止を図っているところです。

「課題が生まれるのに、なぜ端末を使わせるのか」という疑問もあるかと思えます。しかし、これからの時代を生きていく児童生徒は、こういった課題に常に向き合っていく必要があります。狩猟社会(Society1.0)の時に、危険ではあるものの、子供達に狩りの技術を教える必要があつたように、超スマート社会(Society5.0)を生きる子供達には、これらの課題を解決するための情報活用能力等を身に付けさせていく必要があるのではないのでしょうか。

幸手市立行幸小学校の取組

十一月二十五日(木)に幸手市教育委員会が訪問した際、幸手市立行幸小学校(井上弘江校長)では、児童生徒への情報モラル教育も行っていました。以下に取組を紹介します。

情報モラル教育の実際

訪問した日は、幸手市で取り入れている、ベネッセの「ミライシード」というアプリケーションにおける、パスワード変更の直後でした。担任の先生が、新しいパスワードを入力する手順を説明すると、すぐに児童は取り組んでいました。

その最中、ある児童が「先生！今までと違って難しい！」と言葉を發しました。すると先生は、「前よりも難しくなつたよね。つまり、他の人にとつても難しい。これなら他の人が勝手にログインできなくなるね」と返しました。それを聞いていた他の児童も、なるほどと頷いていました。

このように、行うこと一つ一つには意味があること、それを子供に理解させることが、情報モラル教育を行っていく上で重要になってきます。また、次に行われた国語の授業では、早速新しいパスワードでミライシードにログインし、協働学習を行っていました。各教科の中に情報モラル教育を少しずつ取り入れていくことも、無理なく進める工夫だと感じました。



幸手市立幸手中学校の取組

幸手市立幸手中学校(島方勝弘校長)は、校是「全力は美なり」の下、自ら課題を求め、目標に向かって進んで努力する生徒が集う学校の実現を目指しています。十一月二十四日(水)に幸手市教育委員会が訪問した際の取組を紹介します。

中学生・高校生向け映像授業サービス

「TRY IT」

中学生・高校生向け映像授業サービス「TRY IT(トライイット)」とは、株式会社トライグルが運営している映像授業サービスのことで、市HPでも既に御紹介しているところですが、幸手市内中学校に在籍している生徒の皆さんは、このサービスを利用することができます。

四千本以上の授業をいつでもどこでも見ることができただけでなく、学習量の円グラフで学習ログを確認したり、解説文で要点を確認したりできるなど、オンラインならではの機能も充実しています。

利用するには、各校で配付される、各目のIDやパスワードが必要で、幸手中学校では、いち早く準備を整えたため、既に全生徒がこのサービスを活用できる状態となっています。

これから冬休みを迎えますので、この「TRY IT」を活用した、更なる学びの定着が期待されるようになります。



Try ITの特徴
1. 授業科目でも、学習できる科目が充実
2. 1授業は約15分、10分前後でサクッと学習
3. 4000本の授業のことで、全課アスタが対応可能

ICT活用が当たり前となった一年

令和三年度に本格的な利活用が始まった一人一台の学習者用端末ですが、九月が経過した現在、児童生徒は、端末を学校や家庭で当たり前前に使いこなすようになりました。

この日参観した三年生の外国語の授業では、生徒同士の交流や学習内容の復習の場面で端末を利用していました。生徒からは何も質問が無く、「使うことが当然」という雰囲気の中で授業が進んでいました。

新しいものが取り入れられると、誰しも不安を感じる時があります。特に、GIGAスクール構想の推進により、ICTを活用する流れが、未だかつてないスピードと規模で各地の教育現場で起こつた今年当初は、多くの人が今後の不安を抱えていたことと思います。

しかし、先述したとおり、子供達は見事に端末を使いこなせるようになりました。不安な中でも、「まずやってみる、やらせてみる」というマインドで取り組んだ先生方の御尽力のお陰だと、強く感じました。ICTが特別なものでなく、文房具のように当たり前のものとなった一年。それを体現するような、幸手中学校の生徒の姿でした。

